

執筆要領

1. 原稿は、日本語・英語・フランス語のいずれかを使用すること。
2. 原稿は、「論文」または「資料」とする。「論文」は、執筆者自身による未発表の研究論文、「資料」は、研究・分析のための資料を研究者一般が利用できる形にして掲載するもので、言語テキスト、語彙資料、歴史資料など。
3. 原稿は、以下の要領で作成すること。
 - a. MS-Wordで作成すること。
 - b. A4判で、天地左右とも余白22ミリ。日本語の場合は文字サイズ10.5ポイントにて、横書き43字×40行、英語またはフランス語の場合は、文字サイズ12ポイントを使用し、ダブル・スペースで入力すること。
 - c. 表・図などには表題と通し番号を付けること。
 - d. 特殊文字・記号を用いた場合には、その一覧表を添付すること。
4. 原稿は、1枚目を表紙とし、「論文」「資料」の別のほか、表題、執筆者名、所属・職名（日本語原稿の場合には、日本語・英語の両文）、メールアドレスを記す。2枚目以降には、執筆者名および所属など筆者を特定できる情報を記載しないこと。
5. 2枚目以降は、論文または資料の本文とし、「論文」「資料」の別、表題に続いて要旨、キーワード、目次、本文を記す。その際、特に次の点に注意すること。
 - a. 要旨は、英語にて作成すること（300語程度）。
 - b. 目次は、第2階層までの見出しを記すこと。
 - c. キーワードは、日本語と英語それぞれ5語を附すこと。原稿が英語またはフランス語の場合には、英語5語のキーワードを附すこと。
 - d. 注は脚注とし、1から始まる通し番号とすること。謝辞などはタイトル行に「*」として入れ、注番号に含めないこと。
 - e. 論文などに言及、あるいは論文などの一部を引用する場合には、次のような形で著者名、出版年、ページを記す。
山口 1978: 25.
Sapir 1925: 40–41.
6. 参考文献は稿末に一覧としてまとめる。同著者による同年の文献が複数あるものについては、2004a, 2004b などとして区別すること。なお、文献を言語別に分けてもよい。その場合、日本語文献については五十音順とする。文献の記載方法は原則として以下の例に従うこと。
 - a. 単行本 [例]
山口昌男 1978『知の遠近法』白水社。
Jespersen, Otto. 1924. *The Philosophy of Grammar*. London: Allen and Unwin.
 - b. 雑誌 [例]
前嶋信次 1966「テリアカ考—文化交流史上から見た一薬品の伝播について」『史学』38(4): 1–39.
Mithun, Marianne. 1984. “The Evolution of Noun Incorporation.” *Language*, 60(4): 847–894.
 - c. 論文集掲載論文 [例]
飯塚正人 2012「イスラームとは何か？従うべき『知』〈神の命令〉を求めて」床呂郁哉・西井涼子・福島康博編『東南アジアのイスラーム』, 25–28, 東京外国語大学出版会。
Berge, Anna. 2016. “Insubordination in Aleut.” *Insubordination* (Nicholas Evans and Honoré Watanabe, eds.), 283–308, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
*同一論文集の論文を多数引用している場合、その論文集自体を単行本の扱いで見出しとして出し、各論文には次のような要領で論文集を示す方式を取ってもよい。
Berge, Anna. 2016. “Insubordination in Aleut.” *Insubordination* (N. Evans et al. eds.), 283–308.
7. 言語学における例文の引用などについては、以下のように、語または形態素ごとに訳「グロス」をつけること。
 - (1) *nákorera ébaná*
I.am.working.for children
‘I am working for the children.’
 - (2) *n-á-kor-er-a ébaná*
1SG.SUB-PRES.PROG-WORK-BEN-FIN children
‘I am working for the children.’
 - (3) *n-á-kor-er-a ébaná*
1単主語-現在進行-働く-受益-語尾 子供たち
「私は子供たちのために働いている。」
8. 原稿で複製する写真と図を含むすべての資（史）料の使用許可は、執筆者が自己責任において得るものとする。その際、使用許可に対する謝辞は執筆者の責任において明記すること。